

保育の本から

『まいじの保育』

堀口文字の「とばと実践に学ぶ」を読んで

笹原 裕子

1 のびのびと放任

のびのびしそぎて
この一線を越せば、
放任になる

これより前に言えば、

阻止したことになる

この線ここまで、

この世界というものが大事

堀合先生のことばから本書は始まる。

平成元年、幼稚園教育要領が改訂され、幼稚園教育は、「環境を通して行う教育」であると明示されて一〇年、保育者の発想の転換が必要と搖さぶられ、保育の現場は、児童の「主体性」、児童の生み出す「遊び」、児童と共につくる「環境」を：：とひた走った。

保育者の誰もが自由でのびのびとした児童の遊びが展開されることを切望し、様々な保育の試みをした。崇高な幼児教育の理念の実現に熱い思いを燃やして。

が、時に「主体性」や「見守る」などのことばが一人歩きし、保育者は、自分の出方に戸惑い、躊躇し、結果、なすがままになってしまった

また、児童がやりたいことをやりたいようにすることこそ大切と取り組んだつもりが発散的な児童集団を生んだりする。だから、教えるべきなのだと振り戻しの声が上がつたりもする。

自由なのか放任なのか、保育の充実を願っているのに保育が空洞化しているのではないのか、保育者の悩み、保育の現場の混迷。環境による教育は、そう容易いことではない。

こうした実践の課題を少しずつクリアーしていこうと、本当の自由とは、保育の本質とはと立ち止まつて問い合わせ、見つめ直そようとす



る時、『まごころの保育』（小学館）は、まさに拠り所の書、啓発の書である。

日本の幼児教育の父・倉橋惣三先生の教えを受け、その教えをお茶の水女子大学附属幼稚園、十文字幼稚園の保育の場で深化実践して五十数年。「保育の達人」と呼ばれる堀合先生の具体的な保育実践に裏付けられた保育原理は、それぞれの保育者がどこでどんなふうに立ち止まろうともその全てを引き受け、応えてくれる実践の原理であるように思う。新卒であろうがベテランであろうが、今、それぞれの保育者が立っている地平から自分の「頭・心・神経を使って」、自分を変え、自分の保育を創り出していく手掛かりを導き出してくれる。そして、保育者の自己課題が深まれば深まるほど導き出されるものも深まっていく。

学びの質の深まりが堀合先生の伝えようとなさつてていることの意味を広く深いものとしていき、「ああ、わかつてきた」「こういうことだつたのか」という手応えが学びの喜びとなり、更なる意欲を搔き立てる。「保育の達人」は、幼児にとつてのみならず、保育を摸索する保育者にとつても「ともにある人」なのだと思います。

本書の内容は、三部構成になつていて、第一部は、冒頭のことばのように堀合先生の保育のエッセンスともいえる堀合語録・保育名言集。短いことばの中に保育の本質を見据える糸口を厳しく、温かく、糸が絡まぬようしきつぱりと示してください。

いつも頭の中に心を入れておきながら、実践で太らせていきたいことばである。

第一部は、堀合先生の保育論（子どもとど

もに創る保育)、第一部のことばを理論づけるとともに堀合先生の保育の原理を五章(子ども中心の保育、保育者の役割、活動を支える社会的基盤、活動の契機と深化、子どもの想像力の発達を促す)に分けて解説。堀合先生の保育を一人の優れた保育者の名人芸に留める事なく、「幼児教育に携わる人びとに一人でも多く知っていただきたい」と内田伸子先生(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授)が熱筆をふるわれたことに心から感謝したい。

第三部は、堀合先生への最新インタビュー(保育の変わるもの、変わらないもの、保育者と子どもの絆づくり等)。堀合先生の語り口がそのままに伝わってくる。

二十一世紀を間近に控え、平成十年十二月には、新幼稚園教育要領の告示があり、平成

十二年度からの実施となつた。激動する社会、教育改革の流れのなかにあって、日々の保育実践に真剣に取り組もうとする時、幼児期の教育の本質を見極めつつ、保育者の一人ひとりが自分を問い合わせる保育者として中味を磨くためにも傍らに置いて、何度も読み返していきたい一冊である。

(岩手大学教育学部附属幼稚園)